

自己PR文の各構成要素の重要性について

伊藤 俊一

情報教育講座

Importance of Each Component in Self-Promotion Essays

Toshikazu ITO

Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. はじめに

文章は、その目的に応じて一定の「型」を持つ場合がある。一般的に、文章の「型」は、文章中出现する構成要素のリストとして表すことができる。

例えば、清道 (2010) は意見文の「型」として「①意見・②理由・③自分と反対の立場とそれへの対応・④まとめ」を設定し、その「型」に則って作文するように促すことで高校生の書く文章が量的・質的により充実したものになることを示した。

古本 (2013) は、「就職活動の際企業に提出する応募書類 (エントリーシート) に自己PR文として書かれた文章」を対象とし、そこに含まれる構成要素を分析・分類することによって、自己PR文が一般的に持つ「型」を明らかにした。

古本の分析では、「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する回答として書かれた自己PR文の中に現れる各構成要素が、3つのムーブとそれらの下位分類としての12のステップに分類された。

古本によると、1つ目のムーブは「【回答】(開始)」であり、その中に「見出し」(ポイントを短く表現)、「質問回答」(問いに対して短く答える)という2つのステップが含まれる。

2つ目のムーブは「【経験の詳細説明】(展開)」であり、その中には「初期」(開始時点での状況・設定を述べる)、「目標」(自分の目標や行動指標・戦略などを述べる)、「困難」(課題の難しさ、お金・時間・能力不足、失敗など、困難な状況を述べる)、「理由」(行動の理由を述べる)、「行動」(自分の工夫・行動・試みを述べる)、「結果」(自分の行動の結果・問題の解決)の6つのステップが含まれる。

3つ目のムーブは「【経験の活用】(結び)」であり、「現状」(現在実行中の行動)、「経験意義」(自分の経験を抽象度を上げたことばでまとめる)、「仕事言及」(経験・能力の仕事の場面での活用を述べる)、「願望」(採用されることを望む言葉を述べる)の4つのステッ

プが含まれる。

さらに、古本は「大学生が実際に書き、企業の選考に通過したとされる文章」を対象とし、12のステップそれぞれの自己PR文中での出現率を算出した。各ステップの出現率は、「見出し」(21.6%)、「質問回答」(92.2%)、「初期」(33.3%)、「目標」(54.9%)、「困難」(52.9%)、「理由」(11.8%)、「行動」(100.0%)、「結果」(84.3%)、「現状」(19.6%)、「経験意義」(45.1%)、「仕事言及」(15.7%)、「願望」(3.9%)となった。

これらのことから、自己PR文には一定の「型」が存在することに加えて、それぞれの構成要素の出現率には差が認められることがわかった。例えば、「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する直接的な回答を含むと考えられるステップ(「質問回答」と「行動」)はいずれもほぼ100%に近い出現率となっている。その一方で、「願望」のように出現率が5%に満たないステップもある。このようにステップごとの出現率には大きな差が認められた。

これら各ステップの出現率の高低は、自己PR文の書き手自身の判断を反映したものであると考えるのが自然であろう。書き手として特に伝えたい内容を含むステップは書き手自身の判断として自己PR文に優先的に取り入れられることになるだろうし、そうではないステップは自己PR文の「型」としては存在し得るステップであったとしても省略される可能性が高くなるだろうと予想される。自己PR文における各ステップの出現率は、いわば書き手自身が想定している各ステップの重要性を反映したものであると言えることができるであろう。

一方で、自己PR文は他者に対して自身をアピールするという明確な目的を持って書かれる文章であることから、読み手の側がそれをどのように受け取るかということも重要な関心事となる。読み手の側から見たときに、書き手が自身をアピールするために有効なステップは何なのか? その有効性にはステップ間で差が認められるのか? 差が認められるとしたら、そ

これらの差は古本（2013）で認められたステップ間の出現率の差と同じような傾向を持っているのか、いないのか？ これらの問題を本研究では重点的に取りあげる。

本研究では、古本（2013）で明らかになった自己PR文の「型」に則った文章を作成し、それらを読み手の側に立つ実験参加者に評価させるという実験を行なう。具体的には、「企業の採用担当者にアピールする上で各文がどのくらい重要かを5段階評価してください」という指示に対する回答から得られた各文に対する評価データを用いて、各ステップに該当する文の重要度評定値を算出する。それらの重要度評定値によって、読み手の側から見た、書き手自身をアピールするために有効なステップを明らかにする。さらに、それらと古本が算出した各ステップの出現率とを比較することで、読み手の立場と書き手の立場における評価の差異について考察する。

2. 方法

材料：

古本（2013）で特定された12のステップの中から出現率が高かった上位7つのステップ「質問回答」、「初期」、「目標」、「困難」、「行動」、「結果」、「経験意義」に、自己PR文を文章として完結させるための定型的な1文としての役割を本研究においては担わせるステップ「仕事言及」を加えて、計8ステップからなる自己PR文を4種類作成した。いずれも古本と同様、「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する回答として書かれた自己PR文を想定して作成した。それぞれの自己PR文のテーマは「a. サークル活動」、「b. 塾講師」、「c. 授業サポート」、「d. ゼミ活動」とした。4種類の自己PR文の全文はAppendixに掲載する。

それぞれの自己PR文に含まれる8つのステップのうち、本研究で重要性評定のターゲットとするステップとして「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」の5つのステップを選んだ。「質問回答」及び「行動」は「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する直接的な回答となっているため、この問いを想定して書かれた自己PR文の文脈においてはいわば義務的なステップであると判断し、重要度評定のターゲットからは除外した。実際、古本（2013）においても、これらのステップの出現率は「質問回答」（92.2%）、「行動」（100.0%）と非常に高いことが確認されている。また、「仕事言及」は、自己PR文を文章として完結させるための定型的な1文としての役割を本研究においては担わせるために設置したものであることから、重要度評定のターゲットからは除外した。

実験参加者に配られる冊子は、それぞれの自己PR文ごとに2ページから構成されていた。1ページ目には、自己PR文が原文のまま印刷された。2ページ目には、1ページ目と同じ文章が、重要性評定のターゲットとなる「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」のステップに該当する文にのみアンダーラインが引かれた状態で印刷された。2ページ目では、さらに、アンダーラインが引かれた「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」に該当する文の右側のスペースに5段階評定用のスケールが設けられた。スケールの各段階には、それぞれ「1. 重要ではない」、「2. あまり重要ではない」、「3. どちらともいえない」、「4. やや重要」、「5. 重要」という文言が加えられた。この5段階評定用スケールを用い、実験参加者は「企業の採用担当者にアピールする上で各文がどのくらい重要かを5段階評価してください」という指示にしたがって評定を行なうことになる。

は、自己PR文が原文のまま印刷された。2ページ目には、1ページ目と同じ文章が、重要性評定のターゲットとなる「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」のステップに該当する文にのみアンダーラインが引かれた状態で印刷された。2ページ目では、さらに、アンダーラインが引かれた「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」に該当する文の右側のスペースに5段階評定用のスケールが設けられた。スケールの各段階には、それぞれ「1. 重要ではない」、「2. あまり重要ではない」、「3. どちらともいえない」、「4. やや重要」、「5. 重要」という文言が加えられた。この5段階評定用スケールを用い、実験参加者は「企業の採用担当者にアピールする上で各文がどのくらい重要かを5段階評価してください」という指示にしたがって評定を行なうことになる。

実験参加者：

就職活動を終え、既に内定先の企業が決まった状況にある大学4年生50名を対象とする。

手続き：

実験参加者には、4種類の自己PR文のうち1つが印刷された2ページからなる冊子が1部配られる。最初に1ページ目に印刷されている自己PR文を最後まで通して読み、理解する。その後、2ページ目を開き、そこに印刷されている文章（文字列自体は1ページ目と同一である）のうち、アンダーラインの引かれた文（重要度評定のターゲットに相当する）に対して、右側のスペースに印刷された5段階評定用のスケールを用い、「企業の採用担当者にアピールする上で各文がどのくらい重要かを5段階評価してください」という指示にしたがって評定を行なう。

続いて、他の3種類の自己PR文についても、順次冊子が配られ、同様の試行を繰り返す。4種類の自己PR文の配布順序は実験参加者間でカウンターバランスされた。

3. 結果

4種類のそれぞれの自己PR文、および、それら全体について、ターゲットとしたステップ（「初期」、「目標」、「困難」、「結果」、「経験意義」）に対応する文の重要度評定値平均を算出した（Table 1参照）。

1要因5水準の分散分析（参加者内計画）の結果、4種類の全ての自己PR文、および、それら全体において、重要度評定値にはステップ間で有意な主効果が認められた。

a. サークル活動：($F(4, 249) = 38.52, p < .01$)

LSD法を用いた多重比較の結果は「初期」 = 「困難」 < 「結果」 = 「目標」 < 「経験意義」であった

Table 1. 自己PR文の各ステップの重要度評定値

	a. サークル活動		b. 塾講師		c. 授業サポート		d. ゼミ活動		全体	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
初期	2.9	1.1	3.0	1.1	2.5	0.9	3.4	1.1	3.0	1.1
目標	4.0	0.9	3.7	0.9	3.7	1.1	3.9	0.9	3.8	1.0
困難	3.0	1.1	2.1	0.8	2.7	1.0	3.2	1.1	2.8	1.1
結果	4.0	0.9	3.9	0.8	3.2	1.1	3.7	1.0	3.7	1.0
経験意義	4.7	0.5	4.4	0.8	4.3	0.7	4.3	0.8	4.4	0.7

($MSe = 0.7267$, 5%水準)。

b. 塾講師：($F(4, 249) = 68.22$, $p < .01$)

LSD法を用いた多重比較の結果は「困難」 < 「初期」 < 「目標」 = 「結果」 < 「経験意義」であった ($MSe = 0.7139$, 5%水準)。

c. 授業サポート：($F(4, 249) = 39.57$, $p < .01$)

LSD法を用いた多重比較の結果は「初期」 = 「困難」 < 「結果」 < 「目標」 < 「経験意義」であった ($MSe = 0.6978$, 5%水準)。

d. ゼミ活動：($F(4, 249) = 14.32$, $p < .01$)

LSD法を用いた多重比較の結果は「困難」 = 「初期」 = 「結果」 = 「目標」 < 「経験意義」, 「困難」 < 「目標」であった ($MSe = 0.6807$, 5%水準)。

全体：($F(4, 746) = 129.07$, $p < .01$)

LSD法を用いた多重比較の結果は「困難」 < 「初期」 < 「結果」 = 「目標」 < 「経験意義」であった ($MSe = 0.7139$, 5%水準)。

4. 考察

自己PR文の各ステップの重要性

本研究で得られた自己PR文の各ステップの重要度評定値は「企業の採用担当者にアピールする上で各文がどのくらい重要か5段階評価してください」という指示にしたがって評定された値であることから、先にも述べたとおり、書き手自身をアピールするための有効性を読み手の側から評価したものであると考えることができる。

本研究で対象とした4種類の自己PR文全体の平均で見ると、「経験意義」の重要度評定値が最も高く、以下、「結果」、「目標」、「初期」、「困難」と続く結果となった。

この結果からは、読み手の側から見た次のような評価の特徴が伺える。

「初期」、「困難」のように、書き手自身の経験の中で生じた各時点での状況を説明するためのステップの重要度が低く評価された一方で、「経験意義」のように事実としての経験に対して書き手自身の主観的な価値判断を付与するタイプのステップの重要度が高く評価された。このことから、読み手は、事実としての経験の記述よりも、その経験から導き出された書き手自身の

意見・価値判断を含む記述をより重視する傾向にあったと言える。

このことは、本実験で対象とした自己PR文が「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する回答として書かれたものであることを考えると、注目に値する結果であると言えるかもしれない。なぜなら、「大学で力を入れたことは何か」という問いを文字通りの意味に解釈すると、求められているのは事実としての経験の報告であると解釈することもできるからである。この場合、問われるままに事実を報告するならば、「初期」、「困難」のステップは、経験した出来事の状態を説明するための情報を含んでいるステップとして重要視されても良いはずである。それにも関わらず、自己PR文の読み手は、経験した出来事の報告よりも、むしろ、経験から導き出された書き手自身の意見・価値判断のほうを重視したと見做すことができるのである。

書き手自身の意見・価値判断を読み手が重視する傾向は、「目標」のステップの重要度が比較的高かったことから伺える。「目標」は「経験意義」に次いで重要度評定値が高いステップであった。「目標」もまた、「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する文字通りの意味での回答と言えるような事実の報告ではなく、その事実に対する書き手自身の意見・価値判断を含むステップであると考えられる。

以上のことをまとめると、「読み手の側から見た、書き手が自身をアピールするために有効なステップ」は、事実としての経験そのものの報告ではなく、むしろ、その経験の動機となった目的や、その経験から得られたことの意義を書き手自身が主観的にどう判断したかという内容を含んだステップであったと言えよう。

自己PR文の各ステップの重要性と出現率の比較

先にも述べたとおり、自己PR文における各ステップの出現率は、「書き手が想定している各ステップの重要性」を反映したものであると考えることができる。

本研究で得られた各ステップの重要度評定値と古本(2013)の調査によって得られた各ステップの出現率とを比較することで、読み手・書き手のそれぞれの評価の特徴とその差異が見えてくると考える。

重要度評定値と出現率のそれぞれを値の大きなものから順に順位づけしたときに (Table 2参照)、顕著な

Table 2. 自己PR文の各ステップの重要度評定値と出現率

	重要度評定値		出現率 (%)	
	平均	順位	平均	順位
初期	3.0	4	33.3	5
目標	3.8	2	54.9	2
困難	2.8	5	52.9	3
結果	3.7	3	84.3	1
経験意義	4.4	1	45.1	4

差、すなわち本研究において2位以上の差が認められたステップは、「経験意義」（重要度評定値：1位，出現率：4位）、「結果」（重要度評定値：3位，出現率：1位）、「困難」（重要度評定値：5位，出現率：3位）であった。「経験意義」は重要度評定値に比べると出現率が低かった。このことは、読み手の側は「書き手が自身をアピールするために有効なステップ」として「経験意義」を捉えているにも関わらず、書き手が自己PR文に含める優先度は必ずしも高くなくことを意味する。逆に、「結果」、「困難」は重要度評定値に比べて出現率が高かった。「結果」、「困難」は、読み手はさほど有効なステップとは捉えていないにもかかわらず、書き手が自己PR文に優先的に含める傾向が強いことを意味する。

これらのことから、自己PR文の書き手は、読み手が望んでいる以上に自身の経験したことを出来事の連鎖として表現する傾向にあることが伺える。例えば「途中でこんな問題が起きました。しかし、最後には〇〇できました。」というような出来事の連鎖としての表現を採用しがちであるということである。しかし、実際に読み手が望んでいるのは、その経験に対する書き手の意見・価値判断であり、そこで重要視されるのは、むしろ、「目標」、「経験意義」といったステップなのである。

このように、自己PR文において書き手、読み手のそれぞれが重要視するステップには違いがあることがわかった。

5. まとめ

本研究では、自己PR文の各ステップの重要度評定値と出現率を比較することで、自己PR文において書き手、読み手のそれぞれが重要視する事柄には違いがあることが明らかになった。

本研究で対象とした「就職活動の際企業に提出する応募書類（エントリーシート）に自己PR文として書かれた文章」が実社会で使用される場面を想定するならば、本研究で言う「書き手」の役割を果たすのは就職活動中の大学生、「読み手」の役割を果たすのは企業の採用担当者ということになる。

就職活動中の大学生が企業の採用担当者に向けて自

身をアピールすることを目的として自己PR文を書くのなら、たとえ「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する回答であろうとも、経験したことを事実として報告すること以上に、その経験の目的やその経験から得たことの意義を重点的に記述し、説明することが求められるということが本研究においては示唆された。

引用文献

- 古本裕子（2013）就職活動における自己PR文の談話分析 日本語教育方法研究会誌, 20 (1), 80-81.
清道亜都子（2010）高校生の意見文作成指導における「型」の効果 教育心理学研究, 58 (3), 361-371.

Appendix

本研究で用いた「大学で力を入れたことは何か」という問いに対する回答として書かれた4種類の自己PR文の全文は以下の通りである。

a. サークル活動

（質問解答）

私はサークルで企画長の役職に就いて活動しました。

（初期）

始めた頃はイベントの参加率が7割ほどでとても成功と呼べるものではありませんでした。

（目標）

私は部員のニーズを掴み参加率をあげることを目標にしました。

（困難）

自分たち企画側が楽しそうだった企画では参加率はあまり伸びず、変化が見られないことが多かったです。

（行動）

アンケートを実施したり、積極的に相手と話す等、相手の考えを理解するための行動をしました。

（結果）

その結果、参加率も次第に上がり最終的には常に9割をキープできるようになりました。

（経験意義）

上に立つとき、仲間たちとコミュニケーションをとり、どうしていくべきか考えることが大切だと学びました。

（仕事言及）

社会に出ても顧客のニーズに応えられる提案型の営業マンになりたいと考えています。

b. 塾講師

(質問解答)

個別指導塾のアルバイトに取り組みました。

(初期)

初めは授業での話し方がごちなく、生徒も理解しているかわからない状況でした。

(目標)

塾にいた講師の授業を観察することがあり、感銘を受けその方のような授業をしたいと思い、取り組むことにしました。

(困難)

大学の授業などとの兼ね合いで、アルバイトをする機会になかなか恵まれず、工夫を凝らせるくらいの授業回数をこなすことができませんでした。

(行動)

私は、アルバイトの時間以外で相手に好感を持たれる話し方を本やその講師の方や大学の教授の授業を参考にし、自分の授業に活かしていきました。

(結果)

その結果、私自身もより良い授業を行える様になり、多くの生徒から「先生の授業わかりやすい」という言葉を頂きました。

(経験意義)

向上心を持って、人との接し方や指導法などを学んだ経験は社会に出ても必ず役に立つものだと感じました。

(仕事言及)

この経験を生かし、職場の方々から良いところを吸収するように心がけながら、努力していく決意です。

c. 授業サポート

(質問解答)

中学校の授業などのサポートをするボランティアに力を入れました。

(初期)

自分と違う世代の人たちと話しをすることはそれまでほとんどありませんでした。

(目標)

将来、中学教師になるという夢があったので、生徒達とのコミュニケーションの取り方などを学び、生かせるようにしたいと思いました。

(困難)

思春期の時期で生徒達はなかなか心を開いてくれなく、コミュニケーションが取れませんでした。

(行動)

そこで、私は自分のことをもっと知ってもらおうと思い、自分の趣味や大学での話、自分の中学時代どう勉強をしていたかなどを休み時間や給食の時にしました。

(結果)

ボランティアに参加する度に、「次はいつ来るの」など生徒たちから話しかけてくれるようになり、また悩んでいることなどの相談も受けました。

(経験意義)

人間関係を育む時、まず自分の事を知ってもらい自分に興味を持ってもらうことが大切だと感じました。

(仕事言及)

この経験を通して、職場でも自分のことをさらけだし、皆と力を合わせて行事に取り組んでいきたいと思えます。

d. ゼミ活動

(質問解答)

私が最も力を入れて取り組んだことは、ゼミ活動における議論活性化のための工夫です。

(初期)

所属する行政学ゼミでは、当初皆が進んで発言しないことにより議論が白熱しないことに問題を感じていました。

(目標)

ゼミが一丸となってもっと発言し合い、議論が盛り上がることを目標としました。

(困難)

発言を無理に促しても、なかなか発言数は増えず、議論を苦手とするゼミ生が多いと感じました。

(行動)

私は、ディベートを試みたり、市民参加が議題の際は「擬似大学自治～生徒参加～」と称しワークショップの手法を取り入れたりするなど毎授業趣向を凝らしました。

(結果)

結果、ゼミの授業では意見が飛び交うようになりました。

(経験意義)

話しやすい具体的な議題を設定することが話しやすい環境を生み出すことがわかりました。

(仕事言及)

この経験を生かし、職場でも様々な企画を提案できる人間になりたいです。

(2015年8月24日受理)